書き抜き読書ノート 2188	2016 年 8 月 12 日

阿部吉雄・山本敏夫著「新釈漢文大系、第 7 巻、老子」明治書院 1966 年 10 月 30 日刊を読む

無用の用（無の効用）

１．〔題意〕

（１）世人は形あるものの有用性は良く知っているが、形なきもの、空虚なるものの有用性を認識しているものは少ない。

（２）家の屋根・柱・床などは、人を居住せしめる室の空虚な部分を形づくるためのものである。

（３）ところが、それに気づいている者は少ない。

（４）かく空虚な部分が真に有用であることを説き、これより連想させて、無すなわち道の有用であることを読者に悟らしめようとするのがこの章の趣旨である。

（５）無の有用なるを説くという意味で、「無用」とこの章に題されているのは適切。

２．〔書き下し文〕

（１）三十の輻は一轂を共にす。

（２）其の無に當りて車の用有り。

（３）埴を挺して以て器を爲る。

（４）其の無に當りて器の用有り。

（５）戸牖を鑿ちて以て室を爲る。

（６）其の無に當りて室の用有り。

（７）故に有の以て利を爲すは、無の以て用を爲せばなり。

３．〔通釈〕

はじめに（道はその存在が知られない。いわば無の如きものであるが、その働きを譬えると次のようである。）

（１）車輪の三十本の輻（や）は一つの轂（こしき）の空虚な部分に集中している。

（２）その轂の空間部が軸を通しているからこそ始めて車輪はその働きをなすことが出来るのである。

（３）粘土をまるめて器を作る。

（４）その器は中の空間部があればこそ物を容れるという器の働きが果たされるのである。

（５）また戸や窓をあけて室を作るが、

（６）室というものは人を容れる空間部があればこそ室としての働きをなすことが出来るのである。

（７）このような訳であるから、有すなわち存在するものが人々に利をもたらすのは、無すなわち存在しないもの隠れたるものが働きをなすからである。

おわりに（道あればこそ万物の働きも可能であり有用となってくるのである。）

４.〔語釈〕

（１）三十輻「輻」は車輪の矢。河上公注によると、昔は月の日数に法(のっと)って車輪には三十本の輻を用いたという。

（２）共一轂「共」は同じくするの意。「轂(こしき)」は車輪の中心にあって軸(じく)を通し、輻を集めている部分。

（３）挻埴「埴」は粘土。

５.〔余説〕

（１）老子や荘子には普通人の考えも及ばない物の見方や考え方が随所に見られる。

（２）この章の如きはその良い一例である。

（３）道という虚無なものの存在を、一般世人は普通意識していない。

（４）それに対して、実はこれこそ最も尊いもの有用なものであるとして、器や室の例を取って合点させる。

（５）その譬喩の巧みさ、着想の奇抜さは、ちょっと他に類を見いだせない。

（６）油絵の如く、画面一杯に絵の具を塗りつけ、いささかの余白をも残さない洋画に対して、中国の絵画は古来主材を簡潔に描くのみに留めて、余白を生かすことに苦心が払われていると聞く。

（７）こういう、いわゆる「無の芸術」の思想根拠も、かような老荘の「**無の効用**」の思想に由来するのではあるまいか。

P27 ～ 29

＜コメント＞

「論語」や「孟子」、「大学」、「中庸」の「四書」とともに是非お読み頂きたい中国の古典が、この「老子」。ここに引用させて頂いた「無用の用」、つまり「無の効用」をはじめとして、人が善く生きるために必要なことが山ほど述べられている。

― 2016 年 8 月 12 日(金)　林　明夫記―